

Artの有賀長雄による訳稿が『東亜美術史綱』としてフェノロサ氏記念会から発行された。

⑥ 日本画科の改革

明治四十一年八月二十九日、日本画科では教授の荒木寛敏と下村観山が辞職し、小堀鞆音が教授に、松岡映丘が助教になり、次いで九月十六日付で福井江亭が教授となった。鞆音はかつて日本青年絵画協会や日本絵画協会などで活躍し、本校助教教授となり、明治三十一年辞職して日本美術院に加わったが暫くして院を離れ、この当時は日本美術協会で活躍していた。歴史画を本領とし、有職故実に精通していることで知られていた。江亭は川端玉章門下。日本青年絵画協会、日本絵画協会、日本画会、无声会などに加わって作家活動を続け、三十六年以降愛知県立工業学校教諭の職にあった。玉章の信任厚く、病氣勝ちの玉章を助けるという条件で起用された。映丘は本校日本画科の卒業生。鞆音に師事し、大和絵復興をめざして研鑽を続けていた。なお、それまで日本画科の助教教授であった鶴田機水はこれより図画師範科の日本画担任となった。

教授陣が揃ったところで正木校長は同科の教育方法を改正した。その概要は「東京美術学校近事」(48頁)に記されているが、附記すれば、この改革で一応流派別教室制度とも言うべきものができ、生徒は一年生から研究生に至るまで、次のいずれかの教室に所属して一貫性のある指導を受けることになった。

第一教室(玉章、江亭)四条派を主体とする。

第二教室(広業、素明)狩野派を主体とする。

第三教室(鞆音、映丘)土佐派を主体とする。

そして、直ちに教室分けが行われたが、その結果、第一教室十七名、第二教室五十二名、第三教室三十七名となった。第二教室に人氣が集まったのは担任教師の画壇での活躍振りが反映したのである。のちに文展で映丘の華々しい活躍が始まると、生徒は素明派と映丘派に分かれて勉強に競争心を燃やすことになる。

退職した教授のうち、寛敏はすでに以前から日本画科では顧問格に退いていたが、観山の場合は辞任の背景がやや複雑であった。彼の所属する日本美術院は、急先鋒の横山大観や菱田春草らのいわゆる朦朧体の画風が悪評を蒙ったことや、他の有力会員が次第に院を離れたことなどにより、明治三十六年頃から急速に衰微し、数々の名作を生んだ日本美術院・日本絵画協会聯合絵画共進会も同年十月の第十五回を最後に廃止となった。院の統卒者である岡倉覚三はボストン美術館顧問となって(三十七年)アメリカに滞在することが多くなり、その間に院は負債を重ねて経営難に陥った。三十七年には機関誌『日本美術』に編集者の塩田力蔵が院の内幕を暴露した「嗚呼日本醜術院」を掲げ、次いで三十八年八月、同誌第七十九号発行後、その発行権も塩田個人に譲渡された(その後原安民の日本美術社が継続発行)。院は全く空虚に等しいものとなり、ただ月例研究会で ある二十日会のみが細々と活動を続ける(三十九年五月まで。)といった有様であった。そこで岡倉は体制立て直しのため三十九年に院の規程を改め、院を第一部(当分東京に置く。幹理横山大観)と第二部(奈良東大寺勸学院内。主幹新納忠之介)とし、自らはあらためて院の主幹となったが、その後、自分の別荘のある茨城県の五浦に院を移転

させることとした。その結果、同年十一月に大観、春草、木村武山とともに観山もまた家族を連れて五浦に移住したのである。当時の五浦は風光明媚とはいえ極めて交通の便の悪い辺鄙な場所であった。観山がこと本校を往き来するのは容易なことではなかったに違いない。『美術新報』(第五卷第十七号。明治三十九年十一月二十日)には次のような記事がある。

時言

美術學校と下村觀山氏

日本美術院は常陸五浦に引移り、院の人々皆亦十一月九日を以て出發せり、而して其人々は横山大觀、菱田春草、下村觀山、木村武山の諸氏と註せらる。下村觀山氏の常陸行に就て世に紛々の取沙汰を生み美術學校對下村觀山氏事件は少くも世人の聽を驚かせり。吾人は茲に其取沙汰の一々を紹介するの愚なるを信じ、而して少くも其真相を發表するの要あるを想ひ聊か真相と信ずべきものを記す可し。

下村觀山氏は美術學校教授よりして、文部省留學生として海外に遊ぶこと年あり、而して歸來美術學校に出でざること久しく、病の故にして月餘の靜養の後、少時教壇に立ちし以來、復た昨今迄其顔を教場に見ざるに及べり。

此の間に於て美術院の改革は行はれたり。從來因縁深かりしものと絶つて、岡倉覺三氏の下に横山大觀、菱田春草、下村觀山、木村武山の諸氏を合せて、常陸に移ることゝなれり。觀山氏美術學校に教授として、又二分科教授新組織(明治三十九年九月下村

觀山主任の新館教室と寺崎広業主任の本館教室に日本画科を二分した(こと)に當りて主任たるの責あるの傍ら、其名を美術院に列して常陸に赴かんとし、而して學校に出でざ(こと)月あり。

校長〔正木直彦〕乃ち觀山氏に其の進退の明白を迫る、諮詛して答へず。進んで美術學校に盡すの義務は其留學生を終て歸りしにて更らに重きを増せり、然も其義務の遂行は欠勤彌久の爲に破らる、然らば潔く退く可きか、はた進んで大に力を致す可きか、二者の内一を選べよとは此際の提供なりしが如し。而して遂に決せず。

然るに美術院送別會は十一月七日を以て梅川樓に開かれんとし、觀山氏被送の一に名を列す。校長乃ち事の解決せられざるに先ち此送別の宴に臨む、事の宜しきを得ざるものなる可しとの旨を傳ふ、觀山氏遂に此宴に臨まざりき。

然るに次で九日出發の時に於て遂に大觀、春草、武山の諸氏と共に行を一にし、常陸にあること數日。

此間如何の交渉ありしか、觀山氏は東京に歸りて、十一月十二三日頃より美術學校に出で、教授に従へり。

人傳へて曰く、今後觀山氏は常陸に一週間、東京に一週間、美術院と美術學校との掛持ちをなすことに於て萬事落着したりと。

事は是に於て解決したるものなる可し。今後の如何は今敢て問ふの要なかる可し。要は遂に黑白を分たず、二者兼併の結果に至りしことを告白するにある可し。

冷靜に觀ずれば、是れ只だ觀山氏一人の進退のみ、世に傳ふるが如き事々しく神經的に云爲するの必要なし。然れども其間の消

息に何等かの暗雲岫を出づるものなきや、今趣かに之を確知すべからず、只だ他日に俟たんのみ。

この記事は欠勤の多い観山がさらに五浦へ移住することになったため、教務上問題視されていたことを示している。そして、一旦は五浦と本校を一週間ずつ交互に掛持ちすることに結着した様子であるが、四十一年入学の川路柳虹が「観山は」新館の主任なるにかゝらず當時殆んど學校に出席せず、先生の顔を見るのは年に一度の卒業競技の時だけ」(352頁参照)と言っていることからわかるとおり、やはり欠勤が多かった。その間に観山の新館教室は成績が物議をかもすということも起こっている。観山の辞職は避け難いものとなっていたと言えよう。

辞職と同時に起こるのは後任選定の問題である。正木直彦の『三松堂日記』第一卷(昭和四十年。中央公論美術出版)にはその辺の事情が次のように記されている。

〔明治四十一年〕三月五日 木曜日 曇 出勤 文部省に牧野

〔伸頭〕文部大臣を訪ひ〔中略〕自分よりは荒木 下村兩教授に辭意ある旨を告げ後任に付き協議をなせり

三月二十三日〔中略〕下村觀山氏に岡倉覺三氏渡米〔前年十一月の渡米をさすか〕の際余に内談したることあるを以て辭表呈出のことを口達す

四月二日 木曜日 曇 午後文部大臣より出省すべきよう申越したれば出行きけるに荒木 下村兩教授辭職に付後任として竹内

栖鳳 小堀鞆音を推薦したるに大臣も同意の旨にて交渉を始むべきやう申渡さる

これによって観山の辞職は岡倉と「内談」の上で決定したことがわかるが、それはさておき、正木校長が寛敏と観山の後任に竹内栖鳳と小堀鞆音を起用しようとしていたことは興味深い。特に栖鳳であるが、実際に正木は当時京都市立美術工芸学校教諭であった栖鳳を呼び寄せようと交渉を重ねている。しかし、結局栖鳳は辞退した。その間の消息を伝える資料に石川光明宛柴田源七書簡二通(明治四十一年八月二日付、同年同月三日付。本学芸術資料館所蔵正木直彦宛書簡中に含まれている)がある。これは正木の代理として交渉にあつた本校教授石川光明に対して京都の栖鳳の代理である柴田源七が出したもので、これに次のような勧誘辞退の理由が記されている。

一、年二ヶ月間東京美術学校に勤務するとした場合(本校側この条件を出したらしい)、帰西中栖鳳の代理をする助教が必要だが、適任者が無く、一貫した教育を行なう上で支障がある。

二、東京美術学校の教授法など、詳細を知らぬまま就任するのは快しとせず、また、栖鳳自身は東京美術学校の教授法その他について抱負や希望を持つてはいるものの、実行は困難と思われる。

そして、柴田は、栖鳳はもしも名誉教授として春秋二回随意に出向いて無報酬で教えるという条件であれば承諾する意向であり、また、一旦名誉教授として東京美術学校に関係を持たせておけば次第に校内の事情に通じ、学校の面々とも肝胆相照らすに至って気持に

も進展があるだろうから、是非この案を実行せよとすすめている。しかし、当時は本校に名誉教授の制度は無く、そのためか勧誘は失敗に終わった。

⑦ 浅井忠追悼会と遺作展覧會

浅井忠は一時本校西洋画科教授となり、フランス留学より帰国した明治三十五年以降は京都高等工芸学校教授に就任し、また、関西美術院長として関西洋画界の指導にあたったが、同四十年十二月十六日に死去した。葬儀は南禅寺金地院で十九日に行われ、翌四十二年三月二十三日には同所で黙語会主催の遺作展が開かれた。本校では『東京美術学校校友会月報』編集部が同誌第六卷第五号にその肖像写真と追悼記事を掲げたほかに、同年五月十日には同じく黙語会主催の追悼会と遺作展覧會が開かれた。月報はこれを次のように報じている。

○黙語會 洋畫家故浅井忠氏を追悼し、本邦美術界に於ける功績を表彰せんが爲め、氏の友人巖谷小波、和田英作、福地復一、小山正太郎、塚本靖其他諸氏の發起にて、今回黙語會なるものを組織せられ、同氏の傳記を編纂し、遺作を蒐集して之を刊行し、紀念會を開き、紀念物を建設する事と爲し、尙五月十日追悼會を兼ね東京美術學校内にて、遺作展覧會を開きたり。

(『東京美術学校校友会月報』第六卷第八号)

○浅井忠畫伯追悼會 先般物故したる浅井忠氏の知己門弟間の組

織せる黙語會にては、五月十日午後一時東京美術學校内に於て追悼會を催したるが、塚本〔靖〕博士開會の辭を陳べ、西園寺〔公望〕首相、牧野〔伸顯〕文相、原〔敬〕内相、大鳥〔圭介〕男爵の弔辭代讀あり。次に金子〔堅太郎〕大博覽會々々長は、明治美術會々々頭として始めて浅井氏を知りて以來、互に誘掖を爲したる事を陳べ、後氏の京都に去るや、同地の美術工藝界に寄與する所多く、四十五年の大博覽會には、氏に對して期待する處多かりしに、今や其溫容に接する事を得ず、氏の知己たると門弟たるを問はず、何れも日本の繪畫會の刷新に努力するは、即ち故人在天の靈を慰むる所なり、斯くの如くして得たる製作品を大博覽會に陳列して、世界の鑑識に訴へ、歐西人よりも名聲を博せんか、故人必ず欣喜すべしと説き、次で花房〔義質〕子又一場の弔辭演説を爲せり。引續きて正木〔直彦〕美術學校長は、巴里に於て故人と相識りて以來、日本繪畫界に貢獻せる氏の功績を贊し、中澤〔の交友を述べるの欠落か〕

〔岩太〕工藝學校長は、京都時代に就きて、夫々陳ぶる所あり、終りに西村新一郎氏は門下生を代表し、巖谷小波氏は發起人を代表して謝辭を陳べ、三時半散會せり。當日列席したるは金子、花房兩子爵、塚本、箕作〔元〕〔元八〕、中澤、松井〔直吉〕、和田〔維〕〔維四郎〕各博士、正木、巖谷兩氏、其他約四百餘名なり。又二時よりは別館に於て遺作品の展覧會を催し、一般の觀覽に供したるが、列品は日本畫、水彩畫、油繪、繪葉書、扇面、陶器の意匠等總べて二百餘點に上りたり。尙黙語會にては、會員を募集して三年間を期し、故人の傳記を作り、製作品を出版すべしと。